シリーズ
元気です 82

みなさまの悩みを電話で受け止めています

社会福祉法人 鳥取いのちの電話

浅井 富美子 さん *Fumiko Asai*　　戸川 幸子 さん *Sachiko Togawa*

きっかけは神戸から

長引く不況を反映してか、自殺者が日本全体で年間3万人以上、鳥取県内でも200人近くとなっています。さまざまな悩みを抱えて孤立し、最後には自殺を考えてしまう人たちに、電話で相談を受けることによって再び生きることを考えてもらうきっかけづくりをするのが「いのちの電話」です。

昭和46年、東京に最初のいのちの電話が開局して以来、全国42都道府県で50カ所が開局しています。鳥取県内での開局は比較的遅く、平成7年10月のことでした。

きっかけは、今は事務局次長を務める戸川幸子さんの夫、故戸川隆さんの来鳥でした。戸川さん夫妻は、神戸在住のときに既にいのちの電話に取り組んでおり、隆さんが鳥取バプテスト教会の牧師として着任したのをきっかけに、鳥取でもいのちの電話開局に向けて動き出したのです。

第1期生認定→開局

戸川さんはそのときのことをこう振り返ります。「神戸から鳥取に来るときに、神戸いのちの電話の事務局長さんが『鳥取でもできたらいいね』と送り出してくれました。こちらに来て鳥取YMCAの齊藤皓彦さん（今は福岡県在住）と知り合い、講演会を何度も開催して、2年くらいかけて一般のみなさんにいのちの電話の活動のことを知っていただいたんです」。

事務局長の浅井富美子さんも設立当初からの会員です。「私は別の教会の教会員だったのですが、そのつながりで声をかけていただいたんです。鳥取いのちの電話の第1期生として養成講座を受け、立ち上げに関わりました」。

まずは養成講座

いのちの電話の相談員になるためには、1年半の準備期間が必要です。

浅井さんによれば、「6～8月に新規相談員を募集して、10月から養成講座を始めます。カリキュラムは『いのちの電話とは』から、青少年の心、法律相談、最後には組織運営まで多岐にわたります。子ども向けにはチャイルドライン（うさ

相談は電話でしっかりと受け止めます

初めて取り組んだ公開講習のようす

ぎの耳）がありますが、中学生くらいになるとこちらにかけてくるので、いじめや、虐待、不登校のことも分かっていなければなりません」とのこと。最後に認定審査を受けて、晴れて相談員に就任します。さらに、就任後も毎月継続研修を受けて研さんを積んでいます。

気持ちに寄り添う

そんな苦労がありながら、二人が相談員を続けているのはなぜなんでしょうか。

「電話で悩みを話すと気が晴れて『胸のつかえがとれてほっとしました』と言っていただけるとき、相談員を続けていてよかったと思います」と浅井さん。戸川さんも「最初は『自分は生きていく価値がない』とおっしゃっていた人が、話した後で『もう一度生きてみようと思う』と言われるんです。その人がその日は安心して眠れたら、小さなお手伝いができたかなと思います」と、相談員の喜びを話してくれました。

もっと会員が増えれば

やはり悩みは人手不足です。浅井さんは「現在70人の相談員がいますが、家庭の事情でやめられる人もあり、なかなか増えません」相談員は無償のボランティアですが、設備や研修会には経費が必要です。経費は県・市の援助や寄付・賛助会員の会費でまかなっており、相談員も賛助会員として会を支えています。

「毎月10日は全国一斉の24時間フリーダイヤルの日です。ふだん通話料は、かけてこられる人の負担なので、『お金がないのでこの日しかかけられない。この日を待っていました』という人もあり、この日はひっきりなしに電話がかかります。本当はいつも無料でかけていただけるのが理想です。そのためにもたくさんの相談員が必要なんです。3月には、「いのちの電話」を知っていただくために、どなたでも参加いただける公開講座を予定しています。ぜひお出かけください」と浅井さんは呼びかけます。

今の時代になくてはならない身近な相談相手として、鳥取いのちの電話の活動はこれからもたくさんの応援の輪を必要としているのです。

鳥取いのちの電話連絡先

相談受付
TEL（0857）21-4343

事務局（応募・公開講座など）
TEL（0857）29-6556

おうちだに画報

新春特別展覧会

参宮・遷宮・伊勢神宮
ー鳥取と伊勢のつながりー

新年　明けましておめでとうございます。

2年の準備を経て、このお正月に伊勢神宮をテーマにした展覧会を開幕します。伊勢神宮の御装束・御神宝、20年に一度の遷宮の歴史や伊勢参りに関する屏風絵など、国重要文化財4点を含むおよそ100点の資料を一挙公開します。今回は、新たに所在が判明した資料からお伊勢参りの一端をご紹介します。

今から160年余り昔、鳥取藩の分知家東館の江戸屋敷で門番をする堀川音次郎と笠田平八は、江戸の勤務を終え国元の鳥取に帰る途中、念願の伊勢参宮をこころざした。三河国吉田（現愛知県豊橋市）近くの大崎という港から16人が乗り合わせての船参宮である。昼過ぎには夫婦岩で知られる二見浦沖に差しかかったが、急に強風が吹き船は沈没。二見の江村の人々により13人が助け出されたが、3人が亡くなる惨事となった。九死に一生を得た堀川らは刀や荷物、フンドシに至るまで残らず無くし「丸のハダカ」になった。江村の役人は、2人が鳥取の侍ということで、因幡国に多数の檀家をもつ伊勢宇治の白鬚大夫屋敷に使いを走らせた。2人は白鬚大夫の檀家ではなかったが、白鬚家を頼りにしたのである。

白鬚大夫は小八という者を江村に向かわせた。小八は2人を引き取り、まず二見茶屋で「伊勢うどん」とお酒をご馳走した。その後、髪結で身なりを整え白鬚屋敷に向かった。この日の晩は白鬚屋敷に宿泊し、念願の参宮は翌日果たしている。何もかも無くした2人に白鬚大夫は交通費と木刀を買う資金、着衣類などを貸した。その年の冬、白鬚大夫が鳥取を廻檀した時に返済すると約束をして伊勢をあとにしたのである（事の詳細、後日談は、展覧会および「図録」を参照）。

※やまびこ館では、元旦の深夜に2人の侍も食べた伊勢うどん（無料・先着200食）を用意してお待ちしています。その他くわしい情報は24ページ参照。

（やまびこ館 学芸員　伊藤康晴）

問い合わせ先
やまびこ館　上町88　TEL（0857）23-2140